

野球の野村克也さんと愛妻・沙知代さん

2020年1月29日
NHK総合TV 他

2020年2月2日（日）早朝、NHK総合TVで「ひとりを生きる野村克也 84歳」を放送していました。半年にわたる長期密着取材の内容を編集したものでした。野村さんの人生観、沙知代さんとの関係、夫婦・家族などについて考えさせられる良い内容でした。



野球解説者として多くのメディアに出演している野村克也氏（2020年1月現在84歳、1935年6月29日京都生まれ）。現役時代は南海ホークスのキャッチャーとしてチームを牽引し、打者としても戦後初の三冠王を獲得する等、名選手、後年は監督として名を馳せました。野村さんは、人生において一番大事なのは「感性、感じる心と学ぶ心」と言っています。奥様・沙知代さんとの二人三脚・オシドリ夫婦（共に再婚）は有名でした。3年前の12月8日、奥様は自宅リビングで野村さんの目の前で亡くなりました（急性心不全・享年85歳）。

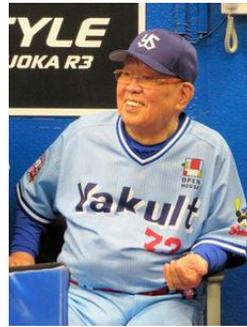
テーブルにうつ伏せになった時、「大丈夫か？」と背中をさすって声をかけた。彼女は「大丈夫よ！」と言ったが、最後の言葉になった。奥さんが亡くなったとき、なぜか涙は出なかったと言っていました。生前の佐知代さんへのインタビューで、彼女は「野村監督は素晴らしい主人です・・・」と明言されていて相思相愛の夫婦で、野村家の中心はサッチーだったのです。

沙知代さんは自分にはないものを一杯持っていて、そこに惹かれ一緒にいる、死ぬまで自分をリードしてくれた・・・が野村さんのコメントでした。実子の克則さんは、現在、楽天の一軍コーチ職。息子さんは、今、自分が野球界にいられるのは親父のお陰で、お袋と野村監督の子供でよかったと言っていた。野村監督が息子さんに何をしてほしいかと聞いたら、息子さんは「生きていてくれるだけで充分・・・」と答えていました。

奥様に先に行かれ、毎日、寂しい思いをしている・・・野球以外何もできない自分をリード（人生の道案内）してくれて現在の自分がいると思っている。困ったことが起きた時の、彼女の口ぐせは、「元気を出そうよ！」と「なるようにしかならないのよ！」の二つで、いつも励まされていた。今も沙知代さんの手のぬくもりが残っているそうです。

野村氏は2010年に引き起こした解離性大動脈瘤、2014年に再発という大病を患った経験があります。しかしそれ以降は、妻・沙知代さんの献身的な支えのお陰で大きな病気にはなっていません。しかし、今は沙知代さんはこの世にいず、一人で生きないといけないのです。

2019年に行われたヤクルト球団創立50周年を記念したOB戦『スワローズドリームゲーム』でも、真中満氏、古田敦也氏、川崎憲次郎氏に支えられ、打席へ向かったのですが、野村さんは、1人での歩行は難しく、支えがないと厳しいようでした。



3歳の時に父が死別、母親に育てられた。幼少期は非常に貧しい生活を強いられており、小学校1年生の頃から兄とともに新聞配達などのアルバイトを行うなどして何とか生活をしていました。

そんな生活から脱却したいという思いの強かった野村氏は、将来は歌手や俳優になることを目指してたのですが、当時プロ野球の大スターであった赤バットの川上哲治氏、青バットの天下弘氏への憧れや、出身地にほど近い兵庫県にて名を馳せていた大友工投手の影響もあり、次第に野球選手を志すようになります。

中学2年生で野球部に入ると、即座に4番・捕手に抜擢され3年生の時には奥丹後地方予選で優勝します。

その後、京都府峰山高校に進学しましたが、目立った成績は残せませんでした。しかし、顧問がプロ球団の監督に手当たり次第に推薦状を送り、南海監督・鶴岡氏だけが返事をくれ、何と南海に契約金0のテスト生として入団しました。

元々能力が高い状態で入団したわけではなかった野村氏でしたが、相当な努力と配球を読む勉強を積み重ね、徐々にプロのレベルに達し、その後、8年連続本塁打王、1965年には戦後初の三冠王にも輝きました。

引退後は指導者の道を歩み、「野村ID野球」と形容されたその指導論は、多くの選手に影響を与え、かつてヤクルトの正捕手として活躍した古田敦也氏もその影響を受けて成長していきました。

監督業を離れてからは、野球解説者として『ぼやき解説』という名で厳しい解説をする姿を多く見られます。

歯に著せぬ言動で、現在のプロ野球界に対して苦言を呈したり、選手への叱咤激励も多く見られる野村氏ですが、妻・沙知代さん（享年85）が旅立たれてからは、少し元気が無くなっている印象があります。

愛妻の死去後は1人暮らしという野村氏。「しょうがないです。耐えなきゃ」とさみしさと戦っているという。食事は出入りしているお手伝いさんや、裏手に住む息子・克則夫婦の妻が用意してくれている。

最近の野村さんは車イス生活が多く、非常に老け込んでいて、心配です。